



薬草生産性向上へ 岐阜薬科大と協定

揖斐川町

岐阜薬科大（岐阜市）と揖斐川町は23日、古くからの町の資源である薬草の活用に関する連携協定を結んだ。大学の専門的知見を生かし、薬草の生産性向上などを図る。

揖斐川町の春日地区（旧春日村）では、伊吹山の薬草をお茶などに用いる文化が根付いている。ただ近年は生産者が減り、現在薬草

協定書にサインする原学長（右）と岡部町長。揖斐川町役場で

を栽培しているのは18人という。

町は2024年度から春日の薬草文化を発信する「いび薬草の里づくりプロジェクト」を開始。連携協定により、薬草園研究室のある岐阜薬科大から生産技術を学び、薬草を原料とする製品の安定生産を目指す。

同研究室の酒井英二教授は「薬草の国内生産を目指す動きが全国で広がっている。（春日のような）中山間産地ならではのノウハウを提供したい」と意気込む。

協定書にサインした原学長は「これまで以上に連携を強めていきたい」と話し、岡部栄一町長は「薬科大の協力の下、春日の薬草で地域経済の活性化を図りたい」と期待した。

（甲斐崎颯斗）